

考古資料を用いたワークシート（１）

石原徹也・柏 徹哉・川原和生・
小林明弘・乗松真也

１．はじめに

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、発掘調査で出土した遺物（考古資料）を展示や、出前授業等を通して活用してきた。また、授業等での遺物の利用をねらいとして、『貸し出し資料カタログ』を学校等に配布したが、学校教育での遺物利用の促進を図るためには、この『貸し出し資料カタログ』と同時に、貸し出し遺物の授業への利用方法を提示する必要性を感じていた。

同様の視点で、高等学校での授業を念頭に置いた指導案が掲載された文献（泉田・石澤・吉川2000）があるが、我々は遺物の授業への利用方法提示としてワークシートというかたちを選択した。遺物とワークシートをセットとした教材を提示することによって、より簡単に遺物を利用した授業が展開できるのではないかと考えたためである。

本ワークシートでは、ワークシートの他に使用する遺物や遺構、ワークシートを用いた授業の展開等の解説を作成している。このワークシートと解説を授業の１つの例として提案している。この提案をもとに授業者が、発展・補足的に授業展開を考えることも可能である。また、ワークシート作成にあたっては、実物を用いた学習の利点を活かすために実物（遺物）の観察、計測等を体験し、実物から得られる情報をもとにした学習が展開できるよう工夫した。

なお、１．は柏・乗松、２．は乗松、ワークシート １ は川原、ワークシート ２ は小林・乗松・柏、ワークシート ３ ・ ４ は柏、ワークシート ５ は小林、ワークシート ６ は石原が担当した。

２．ワークシートと併用する資料の一覧

ワークシート	遺跡名	種類	時代	報告書名	図面・遺物番号
	発掘調査の写真・ビデオなど				
	大 浦 浜 遺 跡	管状土錘	弥生時代前期	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5 大浦浜遺跡	第141図 1～5
	永 井 遺 跡	石鏃	縄 文 時 代 後・晩期	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 9 永井遺跡	第517図545・547～549・551～555
	矢 ノ 塚 遺 跡	石鏃	弥生時代中期	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 3 矢ノ塚遺跡	第228図567・569・572・580・585
	矢 ノ 塚 遺 跡	磨製石包丁	弥生時代	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 3 矢ノ塚遺跡	第173図90
	前田東・中村遺跡	磨製石包丁、打製石包丁	弥 生 時 代 前・中期	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 3 前田東・中村遺跡	第705図582・586、第744図873・874・875
	空 港 跡 地 遺 跡	土師器	古墳時代	空港跡地遺跡建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5 空港跡地遺跡	第114図684・685・692
	大 浦 浜 遺 跡	須恵器	古墳時代	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5 大浦浜遺跡	第193図～第208図
	下 川 津 遺 跡	埴	古代	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 7	第166図
	大 浦 浜 遺 跡	輸入銭	中世	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5 大浦浜遺跡	第332図 1～9
	空 港 跡 地 遺 跡	屋敷地復元写真	中世	空港跡地遺跡建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 4 空港跡地遺跡	図版109
	国 分 寺 楠 井 遺 跡	土師質土器足釜	中世	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 18 国分寺楠井遺跡	第160図876
	空 港 跡 地 遺 跡	磁器皿	近代	空港跡地遺跡建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 4 空港跡地遺跡	第394図2259

参考文献
泉田健・石澤宏基・吉川孝 2000「考古資料を用いた授業（１）」『秋田県埋蔵文化財センター紀要』秋田県埋蔵文化財センター



土錘



輸入銭



磨製石包丁



打製石包丁



縄文時代の石鏃



弥生時代の石鏃



土師器と須恵器



犁



犁



足釜



地図皿

発掘調査ってどうするの？

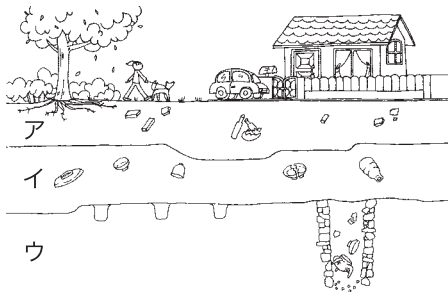
- 1 これから歴史の学習が始まりますが、何千年、何百年も前の人々の食べ物や家の形などが今の私たちにどうしてわかるのでしょうか？

ア おじいさん、おばあさんに聞いた
イ 地面の中を調べた
ウ 本で調べた

- 2 地面の中を調べることを発掘調査といいます。

土をどんどん掘っていくのですが、みなさん、土の色って何色だと思いますか？茶色や黒色だけではありません。灰色や黄色などたくさん色があります。それらの土が積み重なって層を作っています。それを地層（ちそう どそう）といいます。

では、下の図の中で一番古い地層はどれでしょう？



ワンポイント

遺構とは、建物の跡や溝として大地に残されたもののことです。

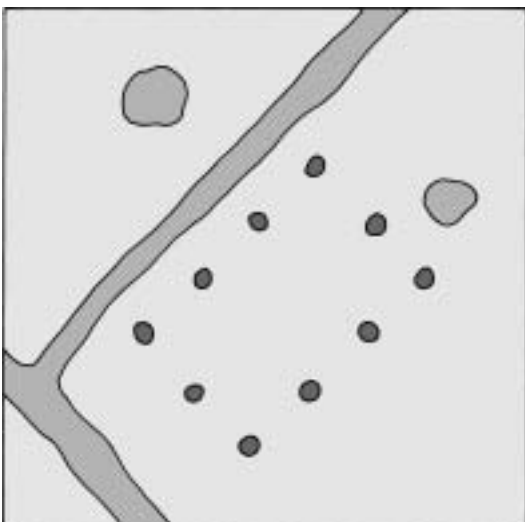
遺物とは、土器や石器など人間の手によってつくられたもののことです。

- 3 上の図のウの地層から遺物や遺構が見つかったとしましょう。地面から約5m下になります。

さて、今から運動場ぐらいの広さの地面を5mも掘らなければならないとしたらどの方法が一番早く掘れるでしょう？

ア 一人で掘る イ クラス全員で掘る ウ 機械で掘る

- 4 ウの地層からは、下の図のような、昔の地面が出てきました。下の図に色をぬりましょう。



機械で掘った後、人間の手でいねいにそうじをしていくと色塗りしたように土の色が違うところをはっきりとしてきます。さて、どれが遺構だと思いますか？

発掘調査ってどうするの？

1 ワークシートのねらい

歴史学習は昔の人々の生活の様子や出来事などを通してその時代背景を考えていく学習である。

その方法として、先人たちの残した文献や今も残る建造物などを調べるのが中心となるだろうが、文献のない時代、またそれ以降の時代に関しても、地下に眠っている人間の活動の痕跡を調べることは非常に重要である。現在分かっている縄文時代や弥生時代の人々の生活スタイルや社会構造などは発掘調査に依るところが大きいのである。

そこでこのワークシートでは、発掘調査の意義と一連の流れを知るとともに歴史学習に対する興味・関心を引き出すことをねらいとしている。

2 学習活動について

(1) 学習活動1について

子供たちはこれまでの生活科・社会科の学習の中で調べ学習を経験している。その経験から、ア・イ・ウどれも子供たちの答えとして出てくるだろう。どの答えも認めた上で例えば「1000年前」などということのを助言して地面の中を調べることに気づかせたい。

(2) 学習活動2について

地面の下は土の色（土色帳によると約420色）や質（砂質・粘土質など）によっていくつかの層に分かれている。これを地層（土層）といい、基本的には下にいくほど古いことになる。

(3) 学習活動3について

発掘調査の大まかな流れを下に示す。

試掘
機械掘削
遺構検出
遺構掘削 遺物回収
写真撮影
埋め戻し

試掘（試しにごく一部を掘ること）で遺構のある深さを確認した後、機械によって調査区域全面をその深さまで掘り下げる。次に掘り下げた面を人の手で丁寧に掃除していくと、土の色や質の違いで遺構がはっきりと見えてくる。遺構にはその形・大きさなどで竪穴式住居・柱穴・溝・ゴミ穴などがある。遺構が確定すると、適宜、写真や図面などの記録を残し、遺物を取り上げながら掘っていく。遺構全てが掘られ、記録が残されると、埋め戻す。

(4) 学習活動4について

遺構が出てきた面を上から見たモデル図である。したがって、色はこの通りではない。子供たちに遺構の見え方をつかんで欲しい。最も濃い部分は柱穴、次に濃い部分は溝と穴、薄い部分は当時の地面である。10基の柱穴を長方形に結ぶと建物が復元できる。

どすい 土錘って、どんな道具？

弥生時代の人たちが魚をとるために使っていた「土錘」という道具です。

1 この土錘をスケッチして、その特徴をつかんでみよう。

2 自分でスケッチした土錘には、どんな特徴があるか、書き出してみよう。

3 この道具は、網といっしょに使われていました。2で考えた特徴をふまえて、どのようにして使われていたのか、絵を描いてみよう。

ワンポイント ～せきすい 石錘～

「おもりいし」とも呼ばれ、網のおもりとして用いられた石器。平らな形のかわら石の両端に、糸をまきつけるための溝をつくる。縄文時代を通じて盛んにつくられた。

4 現在使われているものをじっくり観察してみよう。どんなことがわかるかな？

どすい 土鍾って、どんな道具？

1 ワークシートのねらい

縄文人の生活スタイルは狩猟・漁労・採集を基本としていた。その後、弥生人が稲作を営むようになってからも、ある程度はこの生活スタイルが踏襲されていたと考えられる。中でも今回は漁労具に注目し、その道具（特に土鍾）にはどんな特徴や使い方があったのか、また当時の人々がどのようにして魚を捕らえていたのかを考えさせる。

土鍾は弥生時代から使われた道具であるが、縄文時代にも石鍾が網のおもりとして使用されていた。石鍾とは、扁平なかわら石の両端を打ち欠いたり、すりこんだりして糸がかりをつくったものである。

このワークシートでは、普段なじみの薄い土鍾をとりあげ、先人たちの知恵にふれさせるとともに、縄文時代～弥生時代の漁労具が、釣り針、銚、ヤスだけではなく、網が使われていたことにも着目させ、当時の人たちが使っていた漁労具の形や機能が、今日の道具とほとんど変わらないことに気づかせることをねらいとする。

2 学習活動

（１）学習活動１について

実際に土鍾を手にとらせて観察させ、スケッチをしてみる。その形や特徴をじっくりと見ることによって、この遺物がどのように使われていたのかを考えさせながら描かせる。

（２）学習活動２について

スケッチをしてみて土鍾の特徴を書き出してみる。それぞれの形、材質、どんな加工がされているのかなど、子どもの考えを引き出せるような助言を与えながら特徴を捉えさせるのが望ましい。

（３）学習活動３について

学習活動２で考えたことや気づいた点をふまえて、土鍾を装着した網の絵を完成させる。この時、スケッチで描いた溝や穴、加工痕などに留意するように助言する。

（４）読み物資料 ワンポイント ～石鍾～

漁労具としては、土鍾のほかにも、縄文時代から、石鍾が広く使われていた。石鍾は簡単に材料が入手でき、比較的、加工しやすい利点があったことなどを理解させる。

（５）学習活動４について

１から３までの学習活動により土鍾、石鍾が、網のおもりとして使用されていたことを理解した上で、弥生時代の土鍾、石鍾と現在使われているおもりを比較し、千年以上も経た今の道具とほとんど変わらないことに気づかせる。

石でできたやじり（^{せきぞく}石鑱）を調べよう

1 香川県の遺跡で見つかった石鏃をスケッチしてみよう。

Aの箱に入った石鍬

Bの箱に入った石鍬

重さ () g

重さ () g

2 AとBの違いをみつけよう。

3 AとBの石鏃は、縄文時代と弥生時代のものです。さて、弥生時代の石鏃は、どちらでしょう。そう考えた理由も書きましょう。

弥生時代の石鏃は、

理由 (

ワンポイント - サヌカイトと石器 -

サヌカイトは、明治24(1891)年ドイツ人の学者ワインシェンクによって学名がつけられました。金属をたたいた時ような音がするのでカンカン石とも呼ばれています。香川県坂出市の五色台や金山、奈良県の二上山で見つけることができます。サヌカイトは、かたく、割れ口は鋭くとがる性質があるので、旧石器時代(今から2万年前)から弥生時代(今から1800年前)まで、石器の材料として使われました。香川県のサヌカイトを使った石器は、四国、中国、近畿地方でも見つかっています。ずいぶん昔から石の性質を知って道具として使っていたのですね。

石でできたやじり（^{せきぞく}石鏃）を調べよう

1 ワークシートのねらい

弓矢の発明は、土器の発明とともに狩猟採集が中心であった縄文時代を語る上でも重要な発明である。香川県では、サヌカイトでつくられた石鏃が多数出土し、狩猟にそれらが使われてきたことを物語っている。一方弥生時代に入ってもサヌカイト製石鏃が使われ、大型の石鏃も見られるようになってくる。このことは、弓矢が狩猟の道具から武器としての役割をも持つようになったことを示している。

そこで本ワークシートでは、縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃を比較することによって、弓矢が武器としても用いられるようになったことに気づくとともに縄文時代と弥生時代の社会構造に違いがあることに気づくことをねらいとしている。

2 学習活動について

（１）学習活動１について

石器の加工技術や型式などの情報伝達手段として実測図がある。実測図は、写真のような写実的表現とは異なり、自然面と加工面の区別、剥離の順番や切り合い関係から製作工程の復元等の情報整理に基づく認識表現である。

この活動では、実際に石器を手にとってスケッチすることによって、加工手順や風化の違い等に気づいていって欲しい。また、大きさや重さを計り数量化することも経験して欲しい。

（２）学習活動２について

大きさ・重さともに弥生時代のものが大きくなっている。白乳色に風化が進んでいるものが縄文時代のものであると気づく子どももいると思われる。同じサヌカイトであっても縄文時代と弥生時代では、採石場所が異なっている場合が多く、材質の違いを指摘する子どももいる可能性がある。

（３）学習活動３について

まず学習活動２で見つけた違いを交流し整理することが大切である。違いを発表し黒板上で整理したり、大きさ・重さについてはグラフにまとめたりする活動が考えられる。

道具の違いは、その使用目的の違いに関係していることを指摘し、縄文時代と弥生時代の弓矢が何に使われたかを考えたい。

（４）読み物資料 ワンポイント - サヌカイトと石器 - について

香川県で採石されたサヌカイトが、瀬戸内海を中心に広く石器の材料として使用されたことを知ることによって、郷土の歴史や文化財について興味をもつことをねらいとしている。

石包丁のレプリカをつくろう

香川県の遺跡から出た作り方の違う2種類の石包丁です。レプリカをつくって使い方を話し合おう。

準備するもの

ものさし はさみ カッター 方眼紙 カーボン紙 厚紙（3から4枚）ボンド 荷造り用のロープ

1 レプリカ（模型）の作り方

（1）ものさしで大きさを測り方眼紙に型紙を作ろう。注意）直接方眼紙の上に石包丁をのせて形を写し取ると遺物を傷つけることになるのでやめよう。

（2）型をカーボン紙を使って厚紙に写し取ろう。3から4枚の厚紙に写し取ろう。

（3）写した厚紙をカッターで切り取り、ボンドで張り合わせよう。

（4）石包丁をよく観察するとひもを通した跡（ひもですりへった跡）があります。ひもを通してみよう。

2 レプリカを使って石包丁の使い方について話し合おう。

（1）どのように持って使うのでしょうか。

（2）どんな作業に使うのでしょうか。

ワンポイント - 磨製石包丁と打製石包丁 -

石を割って形をつくる打製石器は旧石器時代以来使われました。弥生時代になると、石を磨いてつくる磨製石器が伝わりました。

ところが、香川県で出土する石包丁をみると、弥生時代でも古い時代の遺跡から磨製の石包丁が出土するケースが多く、新しい時代の遺跡からは打製の石包丁が出土することが多くなります。これは、はじめに磨製石包丁を使う技術が県外から入ってきて、それをまねて香川県で打製石包丁をつくるようになったと考えられます。それは、香川県で採れる石器に使われる石、サヌカイトでつくる場合、打製でつくった方が効率良くつくれるからだと考えられています。

石包丁のレプリカをつくろう

1 ワークシートのねらい

石包丁は、教科書や資料集に写真がよく掲載されている弥生時代を代表する教材である。しかし、実際にどのように使用したのかについては、写真資料のみでは理解しにくい。また、掲載されている石包丁の多くは一般に使われていた磨製石包丁であるため、香川県でも一般に磨製石包丁が使われていたと思われるがちである。

そこで本ワークシートでは、実物をもとにレプリカ（模型）をつくることによって、より細かく実感をもって実物を観察する力を養うとともに、レプリカを使って石包丁がどのように使われたかについて理解して欲しいと考えている。

2 学習活動について

（１）学習活動１について

実物からレプリカ（模型）を作る活動である。実物を傷つけないように配慮する必要がある。縄紐を使って石包丁を手に固定したため、その使用跡も観察できる。レプリカづくりでは、それを作る過程で実物を観察し、観察から得られる情報をまとめるのも重要な活動である。

今回は、簡単に作ることができる厚紙を張り合わせる方法のレプリカづくりを紹介したが、実際に使われている石材、サヌカイトや結晶片岩、流紋岩等で作ってみるのも面白い活動である。

（２）学習活動２について

レプリカを使って実際の使い方について話し合う活動である。名称から調理に使う包丁と同じように使うと勘違いをする子どももいると思われるが、周知の通り稲の穂先を刈り取る道具である。

石包丁は、石包丁に空いている穴（１穴と２穴がある）に縄紐を通したり、左右の窪みに縄紐を掛けたりして手のひらで石包丁を固定し、手を握るようにして石包丁の刃で稲の穂先を切り採って使う道具であることを見つけて欲しい。

（３）読み物資料ワンポイント - 磨製石包丁と打製石包丁 - について

資料の内容の通り、香川県の石包丁に関して磨製と打製の石器のつくり方に技術の逆転があることに気づいて欲しい。サヌカイトは、打製石器をつくるのに適した石材であり、香川県では、弥生時代に入ってもサヌカイト製の打製石器が広く使われていたことも付け足して欲しい。

こふんじだい 古墳時代の土器

1 香川県内の遺跡で見つかった土器をスケッチしよう。

はじき
土師器

すえき
須恵器

2 二つの土器を比べてみよう。

	土師器	須恵器
色は？		
てざわ 手触りは？		
かた 硬さは？		
音は？		

3 弥生土器と似ているのはどちらでしょう。

[]

4 どうして須恵器は弥生土器や土師器と色や硬さが違うのでしょうか。

[]

ワンポイント - 弥生土器と土師器 -

土師器は弥生土器の流れを受けた土器で、古墳時代から奈良・平安時代にわたって使用され、その後も供え用の器として長く使用されます。土師器の色は、褐色・赤褐色・黄褐色などで、摂氏800度前後の温度で焼かれた素焼きの土器です。

5 まとめ

こふんじだい 古墳時代の土器

1 ワークシートのねらい

大和朝廷が勢力を伸ばしていた五世紀、各地に前方後円墳や大型の古墳も造られた。そこには朝鮮半島からの渡来人が伝えた土木技術が大きな影響を与えている。渡来人はその他にも織物・養蚕・儒教・漢字・須恵器などを日本にもたらした。渡来人が当時の日本に多くの影響を与えたことは古墳時代を学習する中でも大切な点である。

本ワークシートでは、縄文土器・弥生土器の系統である土師器と渡来人が伝えた須恵器を比較することによって、二つの土器の違いを見つけ須恵器の優れている点に気づくとともに渡来人の技術の高さの一端に触れることをねらいとしている。

2 学習活動について

(1) 学習活動1について

二種類の土器をスケッチすることによって、より詳しくより丁寧な観察を期待している。そうしてなされた観察を学習活動2につなげて欲しい。

(2) 学習活動2について

舐めるのは無理だが、五感を使って違いを見つけていって欲しい。詳しく見ると砂粒が混じっていることがあったり、断面の色が違ったりしていることに気づく子も出てくるだろう。

見つけた違いをグループやクラスの中で発表し合い、交流することで二種類の土器に対する認識を共有することも大切である。また、自分には無かった観点到に気づき、友達の良さを認める子もいるだろう。

(3) 学習活動3について

実物の弥生土器または写真を見ることによって、土師器が弥生土器に似ていることにはすぐに気づくと考えられる。補足として「ワンポイント」を参照する。

(4) 学習活動4について

「土が違うから。」という考えがまず出てくるだろう。ここで大切なのは窯で高温で焼くということであるから、土師器も須恵器も同じような土でできているという点を押さえておく。

援助として素焼きと窯焼きの様子の写真などがあれば用意する。

(5) 学習活動5について

窯で高温で焼くという技術が渡来人によってもたらされたことをおさえておく。

(6) 読み物資料 ワンポイント - 弥生土器と土師器 - について

学習活動3でのヒントとして読んで欲しい。

また、須恵器の伝来で土師器が無くなってしまったわけではない。煮炊きには土師器の方が適していたとされている。そういう点も授業では補足する必要がある。

奈良時代の農具

- 1 これは、坂出市川津町の下川津遺跡^{しもかわづ}で見つかった犁（からすき）と呼ばれる奈良時代の農具の一部です。

この農具が、どんな特徴・形をしているのか、考えながらスケッチをしてみよう。

- 2 下の絵は犁（からすき）を使用している江戸時代の風景です。上でスケッチしたものはどの部分か、考えてみよう。



- 3 この犁（からすき）は、今ではあまり使われていません。その代わりに何を使っているか考えてみよう。またその理由も考えてみよう。

奈良時代の農具

1 ワークシートのねらい

カラスキとは、牛馬にひかせて田畑を広く耕すのに用いる農具で、最近の耕作は耕運機で行われるが、以前は「牛鋤（ウシングワ）」と呼ばれ、盛んに使われていた。今回教材として使用するカラスキは一見、これが農具だと認識できないくらい奇抜な形をしている。河川跡から壊れて廃棄された状態で出土したため、へら、とことといった部分は残っているが、他の部分は残念ながら残っていない。しかし、全国でも出土例はほとんどなく、日本最古のカラスキの使用を裏付ける重要な遺物として注目されている。

またカラスキの初現は、奈良時代の歌学書「歌経標式」の中に「淡路の島のカラスキのへら」とあり、文献上では奈良時代まではさかのぼる。平安時代に入ると多くの書物にカラスキの言葉が見え、「倭名類聚抄」にはカラスキの各部の名称が示されている。

今回はかつてのカラスキに触れ、その機能、使用の仕方などを考察させ、カラスキの機能が、今日のスキと変わらないことに気づかせることをねらいとする。

2 学習活動

（１）学習活動１について

壊れて廃棄された状態で出土したため、へら、とことといった部分しか残っていない。しかし、その特異なスタイルを観察し、どのような特徴が見られるか、どの部分で土を耕すのかといったことを考えながらスケッチさせ、その外見を印象づける。

（２）学習活動２について

出土した遺物が生活の中で具体的にどのように使用されていたか想像することは、遺物を理解する上で重要である。しかし、実際の牛馬耕の光景を見る機会がほとんど失われ、耕運機を使っただけの耕作が主流になっている現代では、カラスキがどのように使われていたのかを想像することは、児童・生徒にとって難しい。そこで、カラスキを使用している江戸時代の絵を観察して、その使用法について理解してほしい。また、民具を展示している場所で最近まで使用されていたウシングワを観察し、使った経験のあるお年寄りから話を聞くことも、具体的にカラスキの使用法を理解する上で重要である。

なお、図は江戸時代の絵画資料をもとに描いたものである。ただし、カラスキは奈良時代の下川津遺跡出土資料に置き換えている。よって、厳密には奈良時代もしくは江戸時代の実際の風景とは異なるが、下川津遺跡出土のカラスキの使用状況についての理解を助けることを優先して図を作成した。

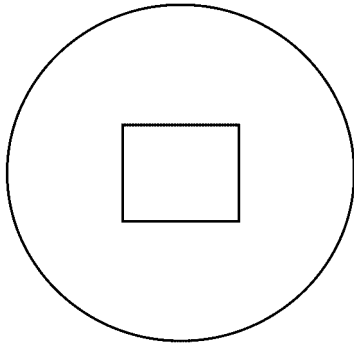
（３）学習活動３について

牛馬耕から機械耕作に替わった意味を考えることを目的としている。農家へ出向き実際の機械耕作用のカラスキを見学する、もしくはVTRや写真資料等の視聴覚教材を利用して、出土したカラスキと比較する学習を取り入れてほしい。その際、多少の形は違ってくるが、基本的な機能は昔とほとんど変わらず現在に至っていること、つまり、奈良時代にはすでに一定度の農耕技術が完成していたこと、それが1300年近くほとんど姿を変えていないことを理解させ、その上で機械化された意味を考えさせることがポイントである。

壺から出てきた銭貨

平成2年（1990年）大川郡津田町（現さぬき市津田町）で道路工事の最中に、14世紀後半ごろのものと思われる備前焼の壺が発見されました。壺のなかには、7431枚もの古銭が入っていました。

（みなさんに渡した銭貨は県内のほかの遺跡から見つかったものです。）



1 銭貨をよく観察しよう。別紙表中のどの銭貨だろうか。

文字を読みとって、左の図に書き込んでみよう。

その時の中国王朝はどこだろう。（ ）

初鑄年は何年だろう。（ 年）

そのお金がつくられたころの日本ではどんな出来事があっただろう。教科書や資料集から主な出来事を一つ探してみよう。

（ 年 ）

2 表を見て、気づいたことをまとめてみよう。

--

3 どんな人がこの壺を埋めたのだろうか。またそれは何のためだろう。

--

ワンポイント

特に宋銭は、日本国内だけでなく、中国を中心とする東アジア地域で通用しうる「国際通貨」だったようです。鎌倉時代から戦国時代ごろにかけて、このような埋蔵銭の出土は、決して珍しいものではなく、全国的にみられるもので、県内でも他に20数例が報告されています。それだけ大量の渡来銭が必要とされていたといえるでしょう。ではなぜ、この時代の日本では独自の貨幣がつくられなかったのでしょうか。想像してみてください。

壺から出てきた銭貨

1 ワークシートのねらい

この古銭の埋納時期は14世紀後半ごろと推定される。根拠は(1)備前焼壺が14世紀後半～15世紀前半の編年に該当すること(2)出土した銭貨のなかで最も新しい至大通寶が初めて鑄造されたのが1310年なので、少なくともそれ以降に埋納されている。さらに中国で鑄造された銭貨が流通し始めてからここに埋められるまでには、ある程度の時間がかかったと考えられることの2点である。当時はまさに南北朝の動乱期に該当するため、不安な社会情勢に備えて蓄えられたものと推察できる。実際、この時期から戦国時代に至るまでが、全国的にもこうした埋蔵貨幣量が多くなる。

このワークシートでは、出土した貨幣のデータをまとめることを通して、鎌倉時代後期から室町時代初期ごろにかけての社会経済状況を大まかにつかませたい。

2 学習活動について

(1) 学習活動1について

銭貨の実物を与えて作業を行わせることで、生徒に興味を持たせたい。また別紙の表を使い、自分で銭貨の情報をまとめさせることで、表にも注目させて学習活動2につなげたい。

は年代や中国の王朝名を、国内の同時代の出来事と結びつけることで、整理・理解させたい。またお金がつくられた時期と埋められた時期の年代差を感じさせたい。

(2) 学習活動2について

グループで話し合う、発表するなどの活動を通して表から情報を読み取らせたい。たとえば、日本のお金が一枚も含まれていないこと。いつごろの(どの種類の)銭貨が多いか。埋められた時期からすると、かなり古い時期の銭貨も含まれていること。一枚だけだが、安南(現在のベトナム)の丁朝の貨幣がふくまれていることなどに気づく生徒がいると思われる。

こうした生徒自身がつかんだ情報をもとに、皇朝十二銭以降、国内では貨幣の鑄造が行われておらず、中世に流通したのは専ら中国銭を主とする渡来銭である。時期、量ともに宋代のものが圧倒的に多く、盛んな日宋間の貿易がうかがえる。初鑄年に関わらず、古い貨幣も通用したと考えられる。鎌倉時代においてすでに、貨幣の需要が一定の高まりを示していたのであろう。室町時代になると明との貿易を通じ、さらに流入する貨幣量が増えるため、選銭が行われるようになる。流通経路は不明であるが、中国銭以外もあることは注目できる。時代が下ると琉球銭なども見られるようになるが、なおさら中世において国内で貨幣が鑄造されていない事実が浮かび上がるなどの発展学習につなげたい。

(3) 学習活動3について

広く流通し始めた貨幣経済の主体となったのは、こういった階層の人々であるのかを考えさせたい。また銭貨を埋めた目的が何かを想像させて、当時の混乱した社会状況をイメージさせたい。

資料

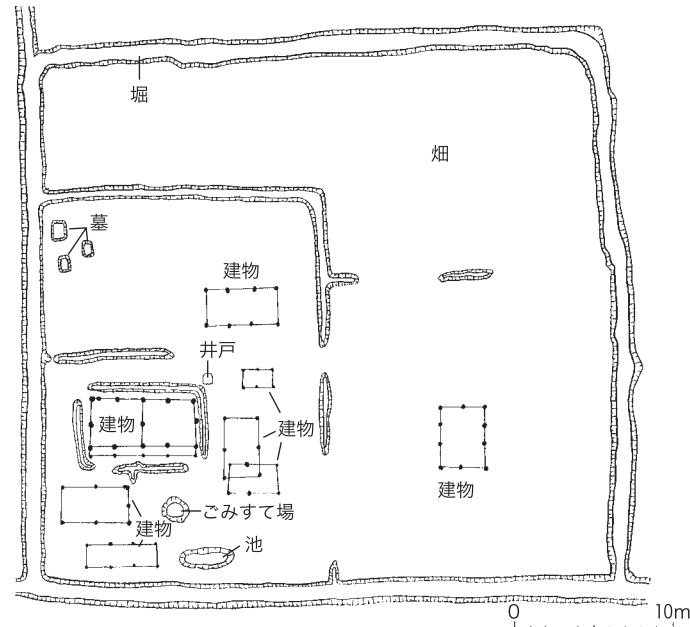
番号	銭貨名	王朝	初鑄年	枚数
1	四 銖 半 両	前漢	BC175	1
2	五 銖	後漢	AD24	2
3	五 銖	隋	AD581	4
4	開 元 通 寶	唐	621	650
5	乾元重寶当十錢	唐	758	29
6	乾元重寶当五十錢	唐	759	1
7	開元通寶紀地錢	唐	845	20
8	周 通 元 寶	後周	955	6
9	唐 國 通 寶	南唐	959	14
10	開 元 通 寶	南唐	960	10
11	宋 通 元 寶	北宋	960	25
12	大 平 興 寶	丁	970	1
13	太 平 通 寶	北宋	976	76
14	淳 化 元 寶	北宋	990	50
15	至 道 元 寶	北宋	995	122
16	咸 平 元 寶	北宋	998	126
17	景 德 元 寶	北宋	1004	164
18	祥 符 元 寶	北宋	1009	198
19	祥 符 通 寶	北宋	1009	118
20	天 禧 通 寶	北宋	1017	156
21	天 聖 元 寶	北宋	1023	353
22	明 道 元 寶	北宋	1032	30
23	景 祐 元 寶	北宋	1034	110
24	皇 宋 通 寶	北宋	1038	962
25	至 和 元 寶	北宋	1054	80
26	至 和 通 寶	北宋	1054	38
27	嘉 祐 元 寶	北宋	1056	85
28	嘉 祐 通 寶	北宋	1056	167
29	治 平 元 寶	北宋	1064	139
30	治 平 通 寶	北宋	1064	26

番号	銭貨名	王朝	初鑄年	枚数
31	熙 寧 元 寶	北宋	1068	697
32	元 豐 通 寶	北宋	1078	868
33	元 祐 通 寶	北宋	1086	670
34	紹 聖 元 寶	北宋	1094	287
35	元 符 通 寶	北宋	1098	118
36	聖 宋 元 寶	北宋	1101	290
37	大 觀 通 寶	北宋	1107	94
38	政 和 通 寶	北宋	1111	326
39	宣 和 通 寶	北宋	1119	20
40	建 炎 通 寶	南宋	1127	2
41	紹興元寶折二錢	南宋	1131	2
42	正 隆 元 寶	金	1157	7
43	淳 熙 元 寶	南宋	1174	51
44	紹 熙 元 寶	南宋	1190	12
45	慶 元 通 寶	南宋	1195	16
46	嘉 泰 通 寶	南宋	1201	9
47	開 禧 通 寶	南宋	1205	7
48	嘉 定 通 寶	南宋	1208	36
49	大 宋 元 寶	南宋	1225	2
50	紹 定 通 寶	南宋	1228	18
51	端 平 元 寶	南宋	1234	1
52	嘉 熙 通 寶	南宋	1237	4
53	淳 祐 元 寶	南宋	1241	11
54	皇 宋 元 寶	南宋	1253	4
55	開 慶 通 寶	南宋	1259	1
56	景 定 元 寶	南宋	1260	9
57	咸 淳 元 寶	南宋	1265	12
58	咸淳元寶折二錢	南宋	1265	1
59	至 大 通 寶	元	1310	2
	銭 名 判 読 不 能			91
	合 計			7431

さぬき市津田町出土の中国古銭一覧表

鎌倉時代・室町時代の屋敷跡を調べよう

下の図は、鎌倉時代・室町時代の屋敷跡の柱跡や溝跡などをわかりやすくまとめた図です。



ワンポイント - ほったてばしらたてもの 掘立柱建物 -

今から200年ぐらい前(江戸時代の終わりごろ)までは、ほとんどの家が地面に穴を掘って直接木の柱を立てて作った掘立柱建物でした。地面に木の柱をうめるために、柱がくさってしまうことが多く、20から30年に一度は、立て直す必要がありました。そのために、鎌倉時代や室町時代の家の跡を発掘すると無数に柱跡が見つかる場合があります。

1 図を下の色にぬり分けてみよう。

堀や溝の跡・・・青 建物の跡・・・赤 井戸の跡・・・黄色 畑の跡・・・茶色

2 屋敷の跡の大きさはどれくらいでしょう。建物の大きさや堀の幅も計ってみよう。

南北()m 東西()m

3 屋敷跡から出土したもの(遺物とよびます)を見てみよう。

土器・・・土を焼いてつくった焼き物です。香川県をはじめ日本全国で作られました。日常使う食器などに使われました。

磁器・・・この時代、日本ではまだ磁器は作られていなかったため、主に中国から輸入されていました。高価な焼き物であったためにお茶入れや花瓶などに使われました。

輸入銭・・・この時代、日本ではお金をつくっていなかったため、中国のお金をそのまま使用していました。

石臼・・・米のモミをとったり、小麦やそばの粉をひいたりするのに使われました。

4 図の屋敷に住んでいた人はどんな人でしょう。話し合ってみよう。

ア 武士 イ 農民 ウ それとも

鎌倉時代・室町時代の屋敷跡を調べよう

1 ワークシートのねらい

中世、室町時代の中ごろまでは、畿内の寺社や天皇・貴族が名目上領有する荘園が存在し、在地の豪族が領有する土地も存在した。また、幕府からは守護・地頭が任命され警察権や租税徴収権をもっていた。一方、在地の有力な農民たちは、独自で土地や水利を開発し、実質的に周辺の土地や人々を支配していた。そのため、支配体制の重層がみられ、階層間の対立も激しかった時代である。住居にもその跡がみられ、農民であっても堀や土塁などの防衛的施設をもち、逆に武士であっても田畑を耕していた。このワークシートでは、屋敷跡の遺構図を調べることによって階層間の対立が存在していたことを知り、そこから出土した遺物を観察することによって、この時期の生活の様子を想像することをねらいとしている。

2 学習活動について

(1) 読み物資料 ワンポイント - 堀立柱建物 - について

中世建物跡遺構の特徴の一つとして、柱穴（小穴、ピット）群があげられる。その要因として堀立柱建物で住居が構成されていたことを知るための資料である。

(2) 学習活動1について

遺構図を色分けすることによって、屋敷がどのような構成をしていたかを調べる活動である。特に堀の存在に気づくことによって防衛的施設が屋敷にあったこと、建物の数を調べることによって、一家族だけが住んでいたのではなく、使用人などが一緒に住んでいたことに気づいて欲しい。

(3) 学習活動2について

遺構図から屋敷跡がどのくらいの大きさがあるのかを調べるための活動である。屋敷跡の大きさやそこにある施設の大きさを知るための活動である。

(4) 学習活動3について

日常的なものは、地域やその周辺から、高級なものは、中国から輸入されていたことなどを知り、当時の生活の様子を遺物から想像して欲しい。

(5) 学習活動4について

堀や中国製磁器の存在、屋敷の施設・規模から、有力者、特に武士の屋敷であろうと考える子どももいると考えられる。また、屋敷内に畑があることや石臼などの出土遺物から農民であったであろうと考える子どももいると考えられる。示した遺構図や出土遺物からそれを特定するのは難しい。むしろこの活動を通して、この時期、武士であっても農民的な性格をもち、有力な農民においても武士的な性格をもっていたことを知って欲しい。

鎌倉時代・室町時代の土器を調べよう

- 1 鎌倉時代・室町時代の遺跡から出土した土器のかけらから、もとの形を絵にしてみよう。

- 2 何のために使われた土器でしょう。使った跡をさがして、話し合ってみよう。

ア 食べ物のもりつけ イ 調理 ウ 花をかざる（花びん）

ワンポイント - 土器の復元 -

出土した土器は、どこから出た土器なのかをはっきりさせるために、土器1つ1つに記号を書きま
す（注記）。そして、同じ場所から出た土器の破片をつけて土器の形をもとの形にして行きます（接
合）。足りない部分は補って土器を復元します。最後に大きさや模様などを計測したり、観察したり
して図や文章にまとめていきます。写真を撮って記録することもあります。

復元することによって、当時の人々がどのような土器をどのように使っていたかなどの生活の様
子が分かります。また、土器の形によって土器の使われていた時期が分かることから、その土器が出土
した遺構がいつ頃のものか分かる手がかりとなるのです。

このように埋蔵文化財の調査では、外での発掘調査と同じくらい、土器の復元などの整理作業が重
要となっています。

鎌倉時代・室町時代の土器を調べよう

1 ワークシートのねらい

従来、中世を授業で扱う場合、文献史学が明らかにしてきた「史実」や今に残る城館・社寺・絵画等の文化財を教材としてきた。しかし近年、考古学の調査研究対象が中世に及ぶに至り、新しい知見を我々に与えようとしている。その一つは、土器の編年作業が急速に進んだことにより、発掘によって検出された集落等の遺跡の継続年代や主体年代（最盛期）がかなりの精度で明らかにされるようになったことである。もう一つは、伝世品の少ない、当時の日常生活の様子を物語る品々が出土したことによって、人々の生活の様子を垣間見ることができるようになったことである。

このワークシートでは、香川県の中世集落から多く出土する脚釜を教材化したい。脚釜は、脚部の間に火をおいて調理に使った土器である。そのため、脚部の内面や鍋の底に火を受けた跡が残っている。この土器を復元する作業を通して、当時の人々の生活を想像するとともに、考古学において土器等の出土遺物を復元し、その用途について考えることの大切さを理解することをねらいとしている。

2 学習活動について

（１）学習活動１について

日常品であった脚釜は、祭祀や墓の副葬品のように完形のまま埋められて出土する場合は少なく、多くの場合、使えなくなった時点で川に捨てたり、地面に穴を掘って埋めたりしたかたちで出土する。そのため、ほとんどが破片となって見つかる。

教材として提示した遺物は、接合しても完全な形にならないことを伝え、一つ一つの破片から全体の形を絵にしていこう助言したい。

（２）学習活動２について

ここでは、全体の形や脚部の内面や鍋の底についた焦げ跡に着目し、調理に使ったことに気づいて欲しい。調理に使ったことを知った時点で、学習活動１で描いた絵に使用している様子（焚き火や土鍋の中の食べ物、それを調理する人など）を書き加える活動も当時の人々の生活を想像する有効な活動である。また、近世（江戸時代）に入ってからなぜ脚付き土鍋が使われなくなったかを話し合うのもこの時代の日常生活を想像する上で重要である。なお、近世以降、脚釜があまり使われなくなった理由は、金属製の鍋の普及が考えられる。

（３）読み物資料ワンポイント - 土器の復元 - について

考古学調査では、屋外での発掘調査と同様に出土した遺物の整理作業の必要性を知ることがねらいとしている。また、土器の復元等から発掘した遺跡や遺構の年代が明らかになってくることも知って欲しい内容である。

一枚の皿から歴史をのぞいてみよう

下の皿は、高松市の^{くうこうあとち}空港跡地遺跡から見つかったものです。皿には地図が描かれていました。



1 皿の縁や、地図の北極・南極には2つの旗が描かれている。どこの国をあらわす旗だろう。

()と()

2 この2つの国にはどんな関係があったのだろう。

()

3 地図にはこの2つの国以外にも、描かれている国・地域がある。地図帳で調べてみよう。現在の国名でかまいません

()

4 これらの国・地域も描かれたのはなぜだろう。またこの皿がつくられたのはいつごろだろう。

()

- ワンポイント -

19世紀の中ごろ、日本はアメリカの圧力によって開国を余儀なくされました。時代は帝国主義の全盛で、ヨーロッパ列強はアジア・アフリカへと植民地獲得に乗り出していました。この流れのなかで、日本も自らの独立を守るため、列強を目標に近代的国家の形成に努めましたが、それは日本の海外進出にもつながっていきます。

なお、善通寺市立郷土館にも地図皿同様この時期につくられたものと思われる杯が所蔵されています。機会があれば、見学してみましょう。

一枚の皿から歴史をのぞいてみよう

1 ワークシートのねらい

この地図皿は 日本とイギリスの良好な関係（日英同盟1902～1921年） 日本が台湾、朝鮮半島を自己の領土として認識していること を示していると考えられる。 に該当する時期は、台湾は日清戦争後の下関条約（1895年）以後、朝鮮半島は日露戦争後の第二次日韓協約（1905年）以後のことである。イギリスは1905年の第二次日英同盟で韓国に対する日本の保護国化を承認したが、1911年の第三次改定ではアメリカの圧力もあり、韓国に関する条項が削除されている。

したがってこの地図皿の図柄は、1905年から1911年の間の国際情勢に相応しく、製作年代もこの時期と考えてよいだろう。兵役の満了や、戦争の終結を記念する品は多く見られるが、この地図皿も当時の気運をあらわすものの一つといえる。

このワークシートでは、この地図皿を県内で見つかった身近な教材として、なぜ日本はイギリスと同盟を結んだのか どのような経緯を経て、日本が台湾・朝鮮半島を領土化していったのか 生産・流通経路はあきらかではないが、こうした皿が地方の一農村にももたらされていることから、当時の国民は台湾領有や韓国併合をどのように受け止めていたのか 以上の3点について考えさせたい。

2 学習活動について

（1）学習活動1・2について

地図の図柄には複数の国・地域が描かれているが、当時の国際情勢においてはイギリスと「日本」を描いたものとみることができる。旭日旗や英国旗はそれを反映したもので、日英同盟を記念したものであることに気づかせるとともに、イギリスと同盟を結んだ理由についても考えさせたい。これは次の学習活動3・4とも関わることである。

またこの皿では日本とイギリスが同等に描かれていることから、急激な近代化に成功した日本の誇らしさが表現されていると指摘できるかもしれない。

（2）学習活動3・4について

台湾、朝鮮半島（大韓帝国）が日本の「領土」として描かれていることに気づかせたい。また日本が台湾や朝鮮半島を領土とした経緯として、日清戦争や日露戦争について復習し、この皿が生産された時期を探らせたい。

（3）ワンポイントについて

ワークシートのねらいの項でも触れたが、この時期には戦争に関わる記念品が多く見られる。当時の雰囲気や国民の対外進出に対する気分の一端をあらわしているといえるかもしれない。ただし、生産・流通形態（いつ、誰が、どのような意図で、どれくらい生産し、それがどこへ、どのくらい、どのように流通していたか）が明らかでないことには十分注意したい。

考古資料を用いたワークシート（１）
石原徹也・柏 徹哉・川原和生・小林明弘・乗松真也

香川の歴史に触れることを目的とした、学校教育で利用できるワークシート10編を作成した。これらのワークシートは、香川県埋蔵文化財センターが保管する考古資料の活用が可能になっている。それぞれ「発掘調査の方法」「縄文・弥生時代の石鏃」「弥生時代の石包丁」「弥生時代の網漁」「古墳時代の土師器と須恵器」「古代の農具」「中世の建物」「中世の鍋・釜」「中世に流通した銭貨」「近代に製作された日本・英国の描かれた地図皿」を題材としている。

Archaeological Documents By Use Of Worksheet（１）
Tetsuya Ishihara・Tetsuya Kashiwa・Kazunari Kawahara・
Akihiro Kobayashi・Shinya Norimatsu

In order to learn the history of Kagawa, 10 volumes of work sheets, which can be used in school education, were made out. These work sheets can be used as archaeological documents kept in the Under-ground Cultural Center of Kagawa Prefecture.

The titles for each field are as follows.

“ Investigation Method Of Excavation ” “ Stone Arrowhead In The Yayoi and Jomon Period ” “ Net Fishing In The Yayoi Period ” “ Earthenware & Ceramic Ware In The Tumulus Period ” “ Agricultural Implement In Ancient Times ” “ Building In The Middle Ages ” “ Pan and Pot In The Middle Ages ” “ Currency In The Middle Ages ” “ Dish With Drawing Of Japan and Britain Map Drawn in the Modern Times ”

利用考古资料制作的工作单（1）

石原 彻也 柏 彻哉 川原 和生 小林 明弘 乘松 真也

我们编制了 10 篇以感触香川历史为目、可以在学校教育中使用的工作单。利用这些工作单能够对香川县埋藏文化遗产中心所保存的考古资料进行灵活运用。

其中、分别以“发掘考察的方法”、“绳文与弥生时代的石镞”、“弥生时代的石器菜刀”、“弥生时代的网渔业(net-fishing)”、“古坟时代的土师器(unglazed earthenware)与须惠器(unglazed ceramic ware)”、“古代的农具”、“中世纪的建筑”、“中世纪的锅与釜”、“中世纪的流通货币”、“近代制作的绘有日本与英国的地图皿”等为题材。

고고 자료를 이용한 워크시트(1)

이시하라 데츠야 · 가시와 데츠야 · 가와하라 가즈나리
· 고바야시 아키히로 · 노리마츠 신야

가가와의 역사에 접하는 것을 목적으로 한, 학교 교육으로 이용할 수 있는 워크시트 10 편을 작성했다. 이러한 워크시트는 가가와현 매장문화재 센터가 보관하는 고고 자료의 활용이 가능하다.

각각 「발굴 조사의 방법」, 「조몽·야요이 시대의 돌화살촉」, 「야요이 시대의 돌칼」, 「야요이 시대의 망어」, 「고분 시대의 하지 키(土師器)와 스에키(須惠器)」, 「고대의 농기구」, 「중세의 건물」, 「중세의 냄비·솥」, 「중세에 유통한 금전」, 「근대에 제작된 일본·영국이 그려진 지도 접시」를 소재로 하고 있다.